

ごん吉くんしポート〜南吉よもやま話〜

第12回

南吉と戦争③

戦時下の南吉作品



終戦70周年を記念し、南吉と戦争の関わりについて紹介する第3回目。今回は、日中戦争以降に書かれた南吉作品についてご紹介します。

昭和12年7月、北京郊外で起きた盧溝橋事件をきっかけに、日本と中国は宣戦布告のないまま戦争状態へ突入しました。

翌年4月、南吉は安城高等女学校の正教員になります。念願の中等学校で教鞭を執る傍ら、創作活動も充実していききました。

しかし、国民生活のあらゆる場面で戦争の影響が強くなるなか、南吉の作品もまた、子どもたちが戦闘機を見に行く「嘘」、軍馬の飼葉にする

草を刈る「草」、空箱や折釘を役場の軍事課に献納する「貧乏な少年の話」、南京攻略戦の模擬戦をして遊ぶ「耳」など、戦争の影が現れてきます。

そうした中で、もつとも時局を

映しているのが「ごんごろ鐘」です。長年、村で親しまれてきた「ごんごろ鐘」を戦争のために献納する話で、太平洋戦争開戦から3か月後の昭和17年3月26日に書かれました。物語の最後は、鐘が爆弾になるように、古いものは新しいものに生まれ変わってはじめて役立つ、という結論で締めくくられます。

時局に迎合したかのように見える「ごんごろ鐘」ですが、南吉が本当に言いたかったことは何でしょうか。古いものは新しいものに生まれ変わって役立つ、というのは一週間後に書かれた「おじいさんのランブ」にも通じるテーマです。しかし、物語全体を見ると、むしろ鐘を献納するまでの過程を丁寧に描いていて、結論は付け足しのような印象を受けます。南吉は、世代を越えた村人たちの絆を描くことで、その象徴である鐘を奪う戦争への静かな批判を込めたのではないのでしょうか。

この作品と前後して、半田市でも寺の鐘が献納されます。現在の岩滑中町の交差点で撮られた記念写真には、鐘との別れを惜しむ大勢の人たちが写っています。

※前回、5・15事件で暗殺された大養毅首相の名前に誤りがありました。お詫びして訂正します。

まちがどVoice

Q

土地や家を子どもに相続させたいと思っていますが、どうしたらよいですか？

A

相続はご家族の状況などにより異なりますので、弁護士に相談されてはいかがでしょうか。半田市では市民のみなさんを対象に「無料法律相談」を実施しています。相続に限らず、一つの相談について30分まで、関係法律や解決のきっかけを一緒に探すことができますので、よろしければ市民交流センターまでお電話でお申し込みください。



【相談日】第1～4土曜日

【予約・相談場所】半田市市民交流センター ☎32-3430